



# 羅針盤

2017年度 第10号  
都立豊多摩高等学校  
進路図書部

2017（平成29）年10月11日発行

## なぜ「面接試験」か？

面接試験を大学（将来の就職する際は企業でも）が課するのはなぜだろうか。15分か20分程ではあるが、その短時間に表れる受験生の「ひととなり」＝「どんな人物か」を知りたいのだ。この受験生は必ず本校で活躍する、是非採りたい——という印象をそのやりとりの中で持ってもらうことが面接では大切といえる。

## 「事柄」で語るな

面接指導が始まる前、必ず面接シートを書いてもらう。質問項目毎に自分の答えとなるポイントを書き留めるものだが、実際に面接練習を始めると、このメモレベルでやりとりが終わってしまうことがよくある。「この学校の〇〇のカリキュラムに引かれました。」「きっかけは〇〇で、将来は〇〇の職業に就きたいのでこの学部学科を選びました。」「3年間部活に打ち込み、部長でした。」——しかし、よく考えて見て欲しい。これらは同じ学部学科を目指す受験生なら誰もが考えてくる受け答えである。もっと言うならこれらは「事柄」を述べたに過ぎない。つまり、いくら事柄を並べても面接官の印象には残らない。なぜなら、それはその人だけのものではないからだ。では、面接ではどのように話せばいいのか。

## どんな自分をアピールしたいか

私の第一志望大学に入りたい、私はこの学部学科で学ぶにふさわしい人物だ、と伝えたい。

あなたはどんな自分を一番表現したいのか。

「探究心を持ってあきらめずにねばり強く頑張る姿勢」か「何にでも『なぜ』と思う好奇心」か。——これらを面接官に受け取ってもらうためには、それらを具体的なあなたにしかないエピソードで語るのがよい。その中に表れるのが「ひととなり」なのだ。

志望のきっかけになった出来事を自分はどう捉え直したのだろうか。その仕事は社会の中でどんな役割を果たし、自分は将来どう働きたいのか。——深く考えた分だけ、あなたにしかない表現ができてくる。面接や「自己推薦書（これを基に面接）」を通して自分がやりたいことがよりはっきりと見えてくるはずだ。そしてそれに伴い自分の中の情熱もそれを伝える生き生きとした表情も生まれてくる。面接はもちろん試験だが、真剣に自分をみつめようとするめったにない機会でもある。自分の表現を見つけてほしい。（田口）

## 面接試験を乗り切るためのステップ

- 1 「敵」を知れ！  
志望校のアドミッションポリシー、他校と違う特色をどんな点と言っているかなど。
- 2 身だしなみ、清潔感、マナーは基本。  
第一印象がすべてです。
- 3 客観的に自分を見る  
親・友達などに「自分」を取材してみる。スマホで面接風景を自撮りしてみる。声の大きさ、癖、言い方の適否、表情もわかります。
- 4 面接練習を繰り返す。  
どんな角度から質問されても、自分が思うように表現するためには場数が必要。普段習っていない先生に練習をしていただき、どのように感じたかを聞くことはとても有効です。

### 「可能性を阻害するもの」

時折、同じスポーツに取り組んでいた昔の仲間たちと集まる機会がある。昨年の暮れにもそのような集まりがあり、現役時代の懐かしい話をする事ができた。

その中に、競技の本場であるアメリカで活躍するようになっている選手がいた。彼と話をするのは初めてだったが、すぐに打ち解けた。彼と私は、10年以上前の同じ年に新人選手が出場するトーナメントの大会にエントリーしており、そして同じ相手に敗北する、という共通の過去を持っていたからだった。

その敗北をきっかけに、私は選手としての活動を中断して教員採用試験の勉強を開始した。自分の選手としての可能性に、限界を感じたからだ。それから1年近くが過ぎ、夏にある教員採用試験が終わった頃、インターネットのニュースで彼が新人の頃に敗れた相手と再戦し、勝利したことを知った。それからも浮き沈みはあったものの、彼は立ち止まらずに選手としてのキャリアを積み、前進し続けた。そして当然、私が活動を再開する頃には手が届かない存在になっていた。

海外の試合で、日本人選手が勝利することは難しい—少し前まで、あらゆるスポーツにおいてそう言われていた時代があった。そういう難しさをアメリカでの試合で感じたことはないのか、と彼に聞いてみた。すると彼はこんなことを言った。

「環境やトレーニング理論の遅れ、フィジカル面でのハンディキャップ、海外選手との対戦経験の乏しさ、日本人が勝てなかった理由は色々と言われているけれど、俺はどれも違うと思う。一番の原因は、海外で日本人は勝てないと思い込んでいた、選手自身の心の中にあったと思うんだ。だから俺は、勝手に無理だと思い込まないように、常に自分に言い聞かせるようにしている。」

彼は今のところ、海外の試合で勝ち星を挙げられてはいない。その現状を考えると、私のようにキャリアの途中で職業を持つ選択をしたことと、どちらが正解だったかは分からない。ただ言えることは、彼は自分自身に限界を作らなかった、ということだ。そして今でも挑戦し続けている。競技者としての時間は残り少ないが、彼が海外で選手として成功しないなどと、誰が言いきれらるだろう。

豊多摩の進学実績は伸び続けている。これは素晴らしいことだ。年々受け継がれてきた努力を怠らないという姿勢が、実を結んでいる証と言える。しかし、少しだけ内省してみしてほしい。自分は西高ではなく豊多摩だから、国公立大学ではなくこのレベルの私立文系大学がふさわしいだろう、と心のどこかで思い込んではいないだろうか。五教科全ての勉強をしたり、難関と呼ばれる試験に挑戦することに、自ら歯止めをかけてしまっていないだろうか。

西高生も豊多摩生も、生まれ持った頭の出来など変わらない。十数年程度の人生で、それほど思考力に差がついていることもない。何らかの差がついているとすれば、それは成功体験があったかなかったか、ということだ。そして成功体験を呼び込むのは、挑戦することに対する継続的なバイタリティだ。数式で表してみると、このことの重要性がよくわかる。合格判定が50%しかない難易度の大学があるとすると、しかし、これと同程度である4つの大学を受験し続けると、全ての大学に落ち続ける確率は1/2の4乗だ。パーセンテージに改めてみるといい。合格しない方がはるかに難しい、という結果が鮮明に見えてくることだろう。(あくまでも数式上の話だが)

「弱気は最大の敵」—名投手であった野球選手の、座右の銘である。これは単なる精神論ではなく、思い込みを捨てて継続的な挑戦を促す訓示だと捉えることもできる。最後に、10年前に新人選手だった際、指導者から教えられた二つの言葉を記しておく。「一切の戦略が立たなくとも、まずは走れ。」 「打つ手は常にある。見えていないだけだ。」 至言として、心にしまっている。

(遠藤)